

## 自由への承認、承認への自由・3

——ヘーゲル『法の哲学』抽象法における契約と不法——

竹 島 あ ゆ み

### はじめに

ヘーゲル『法の哲学』第一部「抽象法」は所有論として始まるが、その冒頭でヘーゲルは「人格は、理念として存在するために、自らの自由にとっての外的な圏域を、自らに与えなければならない」（§41）とする。この外的な圏域とは、具体的には「自由な精神とは直接的に異なっている外的なもの一般、——すなわち物件、自由でないもの、非人格的なもの、法を欠いたもの」である（§42）<sup>1</sup>。『法の哲学』の出発点における自由の意味はまだ限定的であり、それは要するに人格が物件を自分のものにすることができるという以上のものではない。物件自体は意志を持たないが、人格は意志を有するのみならず、物件のうちに自分の意志を置き入れることができるから自由だといわれるのである。いわば人間は自己の意志を物件とする権利、あるいは物件を自己の意志とする権利をもっているのである。

「人格はどんな物件のうちにも自分の意志を置き入れ、これによってその物件が私のものとなるという法的権利を自己の実体的な目的としている」（§44）。

このような、物件に意志を置き入れることは、しかし意志自身に跳ね返ってくる。すなわち、意志はそうすることで初めて現実性を獲得するのである。意志は「何かを自分のものにしよう」と思っているだけでは単に内的な可能性にとどまっているが、実際の占有を通して自らを目に見えるかたちで対象化し現実的な意志となる（図1）。かたちある現実的な物を我がものとするだけではなく、無定形で可能的にすぎない意志であった自分自身をかたちある現実的な意志にしもするのである。

「私が何かあるものを自然的な欲求や諸衝動や恣意から私のものにするという特殊的側面が、占有の特殊な関心事である。しかし、自由な意志としての私が占有のなかで私にとって対象的となり、そのことによってまた初めて現実的な意志となるという側面が、占有における真でありかつ合法的であるもの、すなわち所有の規定をなすのである」（§45）

1. ヘーゲルはまた、「物件は私に對抗し、それ自身で最終的であるのではない」（§61）と述べている。

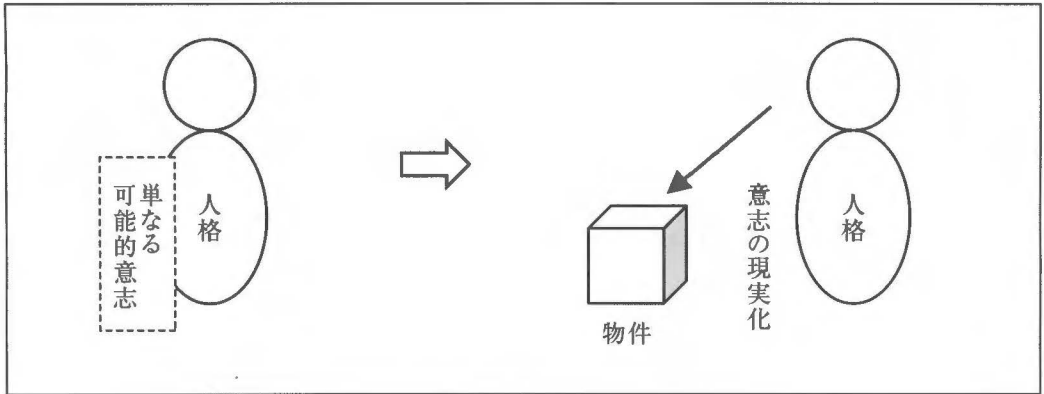


図 1

この所有の段階では人格（私の意志）と物件という人－物関係が中心をなしている。この関係を前提として私の意志と他者の意志という人－人の関係が登場してくるのが第二章「契約」である。

以下ではまずこの契約の圈を、承認と契約との関係という点から考察する(1)。この契約の圈は、しかし抽象法にまつわる偶然性・恣意性から容易に侵害され、攪乱されうる。法は不法に転じ、ひいては犯罪が生じる。その分析がなされている第三章「不法」を考察した上で(2)、実は不法自体も自由の現れの一つであり、それは抽象法そのものの限界を顕にし、また抽象法から道徳性への移行を必然的にするものである、ということを論ずる(3)。

## 1 契約 Der Vertrag

抽象法第一章「所有」では基本的に私と物件との関係、人と物との関係が語られていた。それに対して第二章「契約」では私と他者との関係、人と人との関係が初めて視野に入ってくる。しかしこの転換はいかにして起こりうるのか。そもそも、私はなぜ、またはどのようにして他者と関係しうるのだろうか。抽象法の段階では、それはやはり物を介して初めて可能になるのである。ただし、ここでの物は単なる外的で物質的な物ではない。そのような物はただやはり「物としての人間」にしか関わりえないからである。

「所有物は、それが外的な物件として一個の定在であるという側面からすれば、他者の諸々の外面性に対して存在するのであり、この外面性が具える必然性と偶然性との連関のうちにある」 (§ 71)。

しかし所有の考察の中で明らかになったように、物件は私の意志の置き入れられたものとして、既に単なる外的な物ではなくなっている。このような意志の定在としての物件であって初めて、物は人と人との媒介するものでありうる。このとき人は初めて他者に、ただの手段としてではなく他の「人格」として関わりうるのである。すなわち、人と人との関係は、人格と人

格との関係、私の意志と他者の意志との関係として現れ、こうした自他関係こそが〈自由の基盤〉であるといわれる<sup>2</sup>。まさに共通の意志のうちに、共同性の中に自由がたち現れるのである。ヘーゲルの独特の自由概念、アイザイア・バーリンのいわゆる消極的自由でも積極的自由でもない、〈共同的自由〉の最も原初的なかたちがここに示されている<sup>3</sup>。

「しかし、意志の定在としては、所有物は他者に対して、といっても、ただ他の人格の意志に対して存在する。この意志と意志との関係は、そこに自由が定在をもつ固有な真の地盤である。所有物をもはや単に物件や私の主観的な意志を介してだけではなく、同様に他の意志を介して、したがって一つの共通の意志のうちにもつという、この媒介が契約の圏域をなす」（§71）。

ヘーゲルは契約をこのように人間の共同的自由の現れにとらえ、したがって理性を通じた行為であると規定する。贈与・交換といった経済的行為は、哲学的文脈では往々にして無視あるいは軽視されるか、取り上げられるとしても私利私欲によってなされる非理性的なもののみなされがちであるが、ヘーゲルの見方は全く逆である。このような行為には理性が必然的に介在しており、それだからこそ契約が自由な人格相互間で結び結ばれることが可能になる。ヘーゲルの理解では「経済的なもの」と理性とは決して相反するものではなく、契約へと人を駆り立てる欲求や効用といったものは即自的には理性であり、自由の定在なのである。実はこの点を押えておくことが、後の第三部「人倫」における市民社会像を理解する上で重要になる<sup>4</sup>。

「人間が自分の所有物を占有することと同様に（§45注解）、人間が契約関係のうちに入りこむこと——贈与し、交換し、取引する等々ということは、理性を通して必然的なことである。人間の意識にとっては、欲求一般や好意や効用等が人間を契約に導くものであるならば、これらのものは即自的には理性である」（§71Anm.）。

さて、ここで注目すべきなのは、このように契約が共同的自由の現れとして成立するための前提をなすのは、諸個人間の相互承認であるといわれている点である。

「契約は、契約に入る者どうしが相互に人格及び所有者として承認し合うことを前提する。契約は客観的精神の関係であるから、承認の契機は既に契約のうちに含まれており、

2 しかしその一方で注意しなければならないのは、後述するようにここでの自由は人と人の間に直接存在するのではなく、あくまで物を介在させなければ成り立たないという限界をもっているという点である。これは抽象法全体を通じて保持される限界である。

3 ヘーゲルの自由概念の独自性については竹島（2005）参照。

4 そこでヘーゲルは市民社会を「欲求の体系das System der Bedürfnisse」（§188）——諸個人の自己利益追求のネットワークであると捉えつつも、同時にそこに自生してくる公共的なものの芽生えも見ている。竹島（2005）参照。

前提されているのである」(ebd.)。

契約と、それを通じて現れる自由とは、承認の成立を前提する。普通に考えればこれは承認が自由に先立っているということである。しかし実際のところ、ここには「承認→自由」という前後関係が明確に示されているのか、そうだとしたらそれはどういう内実をもつのかということとは、それほど自明ではない。

既に論じたように<sup>5</sup>、第一には、いわゆる「承認をめぐる闘争」が、精神の発展段階としては既に超えられたものであるということがある。既に第一章「所有」の中でヘーゲルは次のように述べていた。

「法や法学がそこから始まる自由な意志の立場は、既に次のような真ではない立場……人間は奴隷にもなりうるのだというような立場を乗り越えている。こうした過去に見られた真でない現象は、ただようやく意識の立場にある精神に関わる。まさにそこで自由についての概念と自由についてのまだ直接的な意識が、承認の闘争を、主人と奴隷の関係を引き起こすのである」 (§ 57Anm.)。

ヘーゲルの構想した哲学体系は論理学・自然哲学・精神哲学からなるが、その中の精神哲学部門はまた、第一部「主観的精神」・第二部「客観的精神」・第三部「絶対的精神」から構成されている。有名な「承認をめぐる闘争」が登場するのは主観的精神においてである。それを主題的に論じているのは、具体的には『精神の現象学』自己意識章であり、体系期では『エントイクロペディ』中のいわゆる「小現象学」である。一方『法の哲学』の内容は客観的精神に該当するので、精神の形態としては次の段階に発展していることになる。

しかし第二に、精神の段階的発展は、精神の以前の形態が現在の形態のうちに止揚されていることを意味してはいても、以前の形態が全く消滅していることを意味するわけではない。一般に「止揚する aufheben」という用語には、「廃棄する」という意味のみならず、「保存する aufbewahren」、「維持する erhalten」という意味が含まれているとヘーゲルはいう<sup>6</sup>。承認それ自体が歴史上の一回的な事件として過ぎ去ってしまっているのではなく、現在におけるあらゆる具体的な契約関係のうちに保存され、それを下支えしているものでもある。承認なくしては契約も、それを通じた自由もありえないが、逆に承認の関係は、契約という具体的行為を通して日々再生し、更新されているともいえる。承認が自由をもたらすのだが、また自由によって承認が確証されるということもできる。

ヘーゲルは1821/22年の第四回講義においてさらに明確に以下のように述べている。

5 竹島 (2007) 参照。

6 例えば以下の『大論理学』の記述を見よ。Vgl.HW5, S113ff.

「第一のことがらは人間が所有者として互いに承認しあうことである。最初は人間は互いに敵意を抱いているが、その後所有者として互いに承認しあうのである。歴史においては諸民族は暴力的行為をもって始めたが、それには同情の余地はある。しかしそのことを通じて成立する理性的なものは人間が互いに自由なものとして承認しあうことであり、この承認は、所有に関わる自由な意志がその定在を他者の自由な意志のうちに与えられる、という条件である。これが契約の圏域である」(IV,S.74)。

物件は外的なものでありながら、私の意志の置き入れられたものでもあった。それゆえ所有物は個人の意志を媒介するものとなりうる。「この意志と意志との関係は、そこに自由が定在をもつ固有の真なる基盤である」 (§71)。逆に諸個人は所有物をもはや単に物件や私の主観的な意志を介してだけではなく、同様に他者の意志を介して、したがって一つの共通の意志のうちにもつようになる。物件が意志を媒介し、意志が物件を媒介することによって、意志の相互媒介が成立している。これが契約の圏域である。

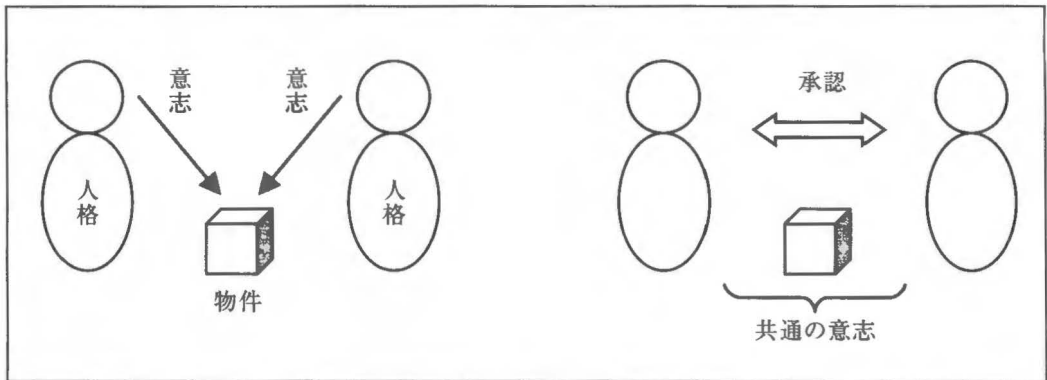


図 2

## 2 不法 Das Unrecht

契約の段階では、私は共通の意志を通して所有物をもつといわれた。所有の段階では個別的であった意志が他の意志との共通性のうちに歩み入り、それが最初の〈共同的自由〉の現われであった。しかしながらこれは逆からいえば、自由が本来の普遍性を十分には実現しておらず、まだやっと単なる共通性という形態のうちに登場するにすぎないということでもある。言い換えればここでの自由は、人と人とを直接取り結んでいるのではなく、まだやっと物に寄りかかる限りで成立しているという限界をもっている。ここに抽象法における自由の限界が顕になる。舞台は反転し、抽象法の最後の章においては、上記のような法に従った所有や契約といった、人格と物件ないし人格相互の関係が侵害され、破壊される場合が考えられている。所有や契約が物に依存した自由にしに到達しえないという限界をもつがゆえに、所有や契約をめぐる諸人格の権利は容易に侵害や衝突にさらされ、法から不法が生じるのである。

それが第三章「不法」であるが、実はヘーゲルは不法こそ法を現実化するのだともいっている。この不法という「法の否定」がさらに否定されることが意味するのは、「法が自己の否定から自己に還帰する」というこの媒介の過程を通して現実的なもの、妥当するものとして規定される」（§82）ということである。ヘーゲルは不法を「A 犯意のない不法」、「B 詐欺」、「C 強制と犯罪」の順に考察している。Aは民事訴訟の対象となるような事柄であって当事者に犯意はなく、Bでは当事者に犯意はあってもなお法に対する尊敬の念は残っているとされる。それらに対してCでは、不法が最も先鋭に表れたものとしての「犯罪」が論じられている。以下ではこの犯罪を中心に上げる。

民事的紛争や刑事的犯罪、ことに後者に現れる暴力や強制は直接的には私の身体や所有物を傷つけ破壊するが、しかしそれゆえに不法なのではない、とヘーゲルはいう。それらが不法であるのは、意志の定在としての身体や物を破壊するからなのである。

「所有において私の意志が外的な物件のうちに置かれているということのうちには、私の意志が外的な物件の中に反映されるのと同じ程度に物件に捕えられ、必然性の下に定立されているということが存する。そこで私の意志は、総じて暴力をこうむることがありうる」（§90）。

意志が物件のうちに自己を置き入れるということは、所有の基礎をなしていたが、これ自体がまた犯罪の可能性を生じさせる。というのも、意志が外的物件のうちに自己を反映させることは自由の現実化ではあるが、その自由は意志が「物件に捕えられ」という制限された自由でもあったからである。このような自由は外的な物件と切り離せないため、また容易に外的な暴力や強制にさらされうる。本稿1で論じたように、契約が人格相互の関係でありえたのは、契約を媒介する物件が単なる外面的な物ではなく、意志の置き入れられたものであったからであるが、それだからこそ、このような物件（身体をも含む）を毀損することは自由の侵害なのである。いわば犯罪は自由を侵害することによって自由の意味を浮き彫りにするという役割をはたしている。

「意志は、定在をもつかぎりでのみ、理念であり、すなわち現実的に自由である。そして意志が自己をそこに置き入れた定在は自由の存在である。それゆえに、暴力 Gewalt や強制 Zwangは、その概念からしてそれ自身を、すなわち、意志の外化あるいは定在を廃棄するような意志の外化である自己を直接に破壊するのである。したがって、暴力や強制は抽象的に取り上げるならば不法なものである」（§92）。

従ってこのようなこのような不法な暴力や強制を廃棄する第二の強制が必要となるが、これが「強制法」としての抽象法である。犯罪は法の否定であるが、刑罰はその犯罪の否定であり、そうであるがゆえに法の否定の否定であるから、刑罰こそが法を再興することになる。しかも

それは、犯罪者の矯正やみせしめを行うという意味での法の再興ではない。

「抽象法は強制法 *Zwangsrecht* である。というのは、この抽象法に対する不法は、外的な物件のうちにある私の自由の定在に対する暴力だからであり、したがって、この暴力に対してこの定在を維持することは、それ自身、外的な行為であり、あの第一の暴力を廃棄する暴力だからである」（§ 94）

ヘーゲルはこのような法によって犯罪者に加えられる侵害（処罰）を、単なる強制ではなく犯罪者自身の「自由の定在」であり、「犯罪者自身における法（権利）」であるとする。なぜなら犯罪者も理性的存在者であり、その行為は普遍的なものであるが、そのこと自体によって犯罪者は普遍的な法を自己の法として認めていることになるからである。

「犯罪者に加えられる侵害は、ただ単に即自的に正当であり——正当なものとして、この侵害が同時に犯罪者の即自的に存在する意志であり、その自由の定在であり、犯罪者の法／権利であるだけではなく、また犯罪者自身における法／権利、すなわち彼の定在する意志のうちに、彼の行為のうちに定立されている法／権利でもある。というのは、理性的存在者としての犯罪者の行為のうちには、その行為が普遍的なものであり、その行為によって一つの法則が立てられているということが含まれているからである」（§ 100）。

そうであるから、もともと犯罪者の行為の背後にある共同体においては、承認が前提されていたことがわかる。しかも犯罪者自身がその承認の当事者として積極的に承認に関わっていたのである。それゆえに、犯罪者に対する刑罰は全くの他者から、外部から一方的に与えられるものではなく、犯罪者自身の承認することがらであり、自己自身の行為であることになる。契約の背後に前提され、契約を共通の意志として、共同的自由の発現として成立させていた承認は、ここでもまた自由を支える前提として働いている。

「この法則を犯罪者自身が自分の行為において対自的に承認してもいたのであり、そこで彼もこの法則を自己の法／権利として、その下に包摂されることを許すのである」（ebd.）

したがって刑罰は犯罪者を侮辱するものではなく、反対に尊敬するものである。ヘーゲルのこの考え方は一見したところ奇妙にも思えるが、我々が人間のみを刑罰の対象とし、動物を刑罰に処しはしないことを考えてもその意図するところは理解できるであろう。

「刑罰が犯罪者自身の法／権利を含むものとみなされる場合、犯罪者は理性的存在者として尊敬されている。——この尊敬は、もしも犯罪者の行為そのものからその刑罰の概

念と尺度が取り出されないならば、犯罪者には与えられない。——また、この尊敬は彼が単に無害にされるべき有害な動物と考えられたり、見せしめや矯正のための目的で罰せられたりするならば、同様に与えられない」 (§ 100Anm.)。

1822/23年の第五回講義では、犯罪者と動物との違いをより明確に次のように述べている。

「犯罪者の行為は個別的であり、つかの間のものであり、時間と空間とによって制限されている。それは個別的なものとして消失してゆく。その行為はしかし動物の行為と同じような個別的行為ではない。それは個別のもの、消失してゆくもの、仮象するもの、外的なものであるだけでなく、理性的なものの行為である。そこに存するのは、この個別的なもの、この行いが、同時に自らのうちに普遍性の概念をもち、その普遍性を通じて同時に法律として立てられるということである」 (V.S.315)。

さて、以上見てきたように抽象法の段階の最後で、自由は「強制法」の形をとっているが、これが強制を行うものであるにもかかわらず自由の定在であるといわれるのは、犯罪に対して自由を守るのみならず、犯罪者の尊厳、すなわち理性的存在者としての自由をも承認し回復するからなのである。もし自由を単に「～からの自由」という消極的自由とのみ解するならば、刑罰という強制が自由であるとする主張は矛盾以外の何ものでもないということになろう。しかしヘーゲルによれば、刑罰に服するとは、犯罪者が自ら行った普遍的で共同的な自由からの逸脱、自分の自由の侵害を、自分自身で回復させるということを意味する<sup>7</sup>。契約の背後に承認が前提されていることは前節で見たが、犯罪と刑罰をめぐる不法の背後にも承認の構造が前提されている。

### 3 抽象法から道徳性への移行

抽象法を現実化する働きを持つのは不法であるが、その最も先鋭化したものとしての犯罪を、直接に廃棄しようとするのが復讐である。裁判官や法律のない社会では刑罰はつねに復讐の形式をとる、とヘーゲルはいう。法に規定された刑罰によるのではなく、犯罪の廃棄を復讐に委ねておいた場合には、それは更なる復讐を生み、止むところをしらない。というのも復讐する意志はたしかに正義を主張してはいるのだが、この正義は偶然なもの、特殊的なものに過ぎないからである。

「復讐は特殊意志の肯定的な行為として存在することによって、新しい侵害となる。復

7 青年期のヘーゲルは草稿『キリスト教の精神とその運命』の中で「愛による運命との和解」という主題を追求している。そこでの犯罪者を巡る考察においては、愛は「犯した罪をなかったことにする」回復と癒しの機能をもつとされていたが、そのモチーフはここに生き続けているといえる。Vgl.HW,Bd.1,341-347.



讐は、このような矛盾として無限進行に陥り、世代から世代へと無際限に継承されていく」（§ 102）。

このような復讐の連鎖は正義を実現するものとはとうてい思われぬ。そうすると、不法の廃棄を目指すことのうちに不法が含まれてしまうことになる。この矛盾の解消を要求することこそが、ヘーゲルによれば「復讐ではなく刑罰を行う正義を要求すること」（§ 103）であるが、それは普遍的なものを欲する意志の要求である。実はこのような要求のうちに既に、道德性の概念が現れており、言い換えれば普遍的正義の要求は抽象法の枠組みを超え出でいかざるをえないのである。ヘーゲルは『法の哲学』第一部抽象法を閉じるにあたって、次のような結びの一節をおいている。

「ここで不法の廃棄のしかたのうちに現存するこの矛盾が…解消されることを要求するのは、主観的な関心や形態から解放された、同様に力の偶然性からも解放された正義、それゆえ復讐するのではなくて刑罰を行う正義を要求することである。ここにはまず第一には特殊的で主観的な意志でありながら、普遍的なものそのものを欲するような意志の要求が存している。しかし、道德性のこの概念は、ただ単に要求されたものではなく、この運動そのものにおいて現われ出ているのである」（§ 103）。

抽象法において自由は、物件の所有という形で私の外にあり、また契約という形で私と他者との間（共通性）にあった。そして、不法に対する法領域の意志は、一応の普遍性を持ちながら、まだ偶然的なものともみなされていた。しかし道德性の段階では「この偶然性が克服され、……自己内反省するもの、自己同一的なものとして……意志の主観性となる」（§ 104Anm.）。

自由な意志の自己実現の展開が『法の哲学』の諸段階をなしているが、第一部抽象法では人格性であった自由意志は、第二部道德性では主観性となる。抽象法における自由とは意志を自己の外なる定在（物件）に置き入れることで始めて現実化される人格的自由であったが、それは既に前節で述べたように物件に依存するがゆえに制限されており、それゆえに不法に転落する可能性を常にもっていた。意志が自己の外に自らの自由の定在をもたざるをえないこのような人格的自由とは異なり、道德性における主観性は自己自身のうちに存在する自由である。それゆえ抽象法末尾において「法から道德への移行」を論じている104節の中で、ヘーゲルは次のように言う。

「意志の自己における現実化は…ただ単に即時的に自由な意志であるのみならず、対自的にも自由な意志であるように、自己を自らの定在のうちにある意志として、自己を自己に関係させる否定性として規定することである。意志がただ抽象法のうちにある場合の人格性を、いまや意志は次のように自らの対象とするのである。つまり、自由の

このように対<sup>・</sup>自<sup>・</sup>的<sup>・</sup>に無限な主観性が、道<sup>・</sup>徳<sup>・</sup>性<sup>・</sup>の立<sup>・</sup>場<sup>・</sup>の原<sup>・</sup>理<sup>・</sup>をなすのである」 (§ 104)。

また、第五回講義及び第六回講義においてもやはり、人格性にかわって主観性が登場してくることによって、第一部抽象法から第二部道徳性への移行が果たされているのである。

「法においては意志は自己の定在を外面的なもののうちにもつ。さて次の段階は、意志が自己の定在を自己自身のうちに、すなわち内面的なもののうちにもつことである」(V,S.327)。

「このようにして意志の主観性は意志の定在をなす。主観性は法の定在であり、法は主観のうちに存するべきである。このことが道徳的立場の原理をなす」(VI,S.298)。

## 文 献 表

### テキスト

ヘーゲルのテキストは以下のものを用い、引用の後に略号とページ数を付記した。『要綱』と『エンツィクロペディ』については節番号のみを示した。

G.W.F. Hegel: *Grundlinien der Philosophie des Rechts*. Werke in zwanzig Bänden, Redaktion Eva Moldenhauer und Karl Markus Michel, Frankfurt a. M.: Suhrkamp, 1969ff., [=HW]Bd.7

G.W.F. Hegel: *Die Philosophie des Rechts. Vorlesung von 1821/22* [=IV], H. Hoppe (Hg.), Frankfurt a. M., Suhrkamp, 2005.

G.W.F. Hegel: *Philosophie des Rechts nach der Vorlesungsnachschrift von H. G. Hotho 1822/23* [=V], in: G. W. F. Hegel, *Vorlesungen über Rechtsphilosophie 1818-1831*, K.- H. Ilting (Hg.), 4 Bd., Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann -Holzboog, 1973-74, Bd. 3, S.5-841

G.W.F. Hegel: *Philosophie des Rechts nach der Vorlesungsnachschrift von K. G. v. Griesheims 1824/25* [=VI], in: a.a.O., Bd. 4. S.67-903.

G.W.F. Hegel: *Wissenschaft der Logik I*. HW, Bd.5.

### 二次文献

Ritter, J. (1997) : Person und Eigentum. Zu Hegels *Grundlinien der Philosophie des Rechts* (§§ 34-81). In: Siep, L. (Hg.) G.W.F. Hegel, *Grundlinien der Philosophie des Rechts*, Berlin, Akademie Verlag.

Mohr, G. (1997) : Unrecht und Strafe (§§ 82-104, 214, 218-220). In: a. a. O.

Schnädelbach, H. (2000) : *Hegels praktische Philosophie. ein Kommentar der Texte in der Reihenfolge ihrer Entstehung*. Frankfurt a. M., Suhrkamp.

加藤尚武 (2006) 『ヘーゲルの「法」哲学』、青土社。

竹島あゆみ (2005) 「自由というアポリア——ヘーゲル『法の哲学要綱』とリベラリズム」、『アルケー (関西哲学会年報)』、第13号。

竹島あゆみ (2007) 「自由への承認、承認への自由・1」『岡山大学文学部紀要』、第48号。

(付記) 本稿は日本学術振興会・科学研究費補助金による研究成果の一部である。